



イチジク株枯病を土壌から簡易に検出する 「枝挿し法」の開発

株枯病菌を現地で簡易に検出できる技術です。
現在、現地適応性試験を実施し、診断条件の最適化を目指しています。

研究開発のきっかけ

- ◆ 株枯病は樹体を枯死させるため、イチジク産地で最も警戒されている土壌病害です(図1)。
- ◆ イチジクの枯死原因には、株枯病以外にも白紋羽病および胴枯病などがあり、それぞれ防除対策が異なります。
- ◆ 枯死原因を正確に診断することで、適切な防除が可能になります。
- ◆ 株枯病菌を土壌から簡易に検出する「枝挿し法」を開発しました。



図1 株枯病により枯死したイチジク



図2 現地圃場に枝を挿し込んだ状況



図3 枝の培養状況

研究成果の概要

- ◆ イチジク‘蓬莱柿’の前年枝を30cm程度にカットする。
株枯病を検査したい圃場に、枝を垂直に25cm程度挿し込みます(図2)。
- ◆ 枝を土壌から抜き取り、ビニール袋に入れ、25℃で約10日間培養します(図3)。
- ◆ 本病原菌は特徴的な子のう殻や子のう胞子塊を形成します。
肉眼での観察が可能で、特別な装置や技術がなくても菌の存在が判断できます。



子のう胞子塊
(淡黄色のクリーム状)

子のう殻
(1~2mmの黒い髪の毛状)

図4 枝先に発生した子のう殻および子のう胞子塊